原著

吉益東洞の南部侯往診についての新史料

寺澤 捷年^a 板澤 正明^b^a 千葉中央メディカルセンター和漢診療科, 千葉, 〒264-0017 千葉市若葉区加曽利町1835-1^b ポランの内科クリニック, 岩手, 〒020-0021 盛岡市中央通1-7-25 朝日生命盛岡中央通ビル1F

A New Historical Material on the Visitation to Lord Nambu by Dr Yoshimasu Todo

Katsutoshi TERASAWA^a Masaaki ITAZAWA^b^a Department of Japanese-Oriental (Kampo) Medicine, Chiba Central Medical Center, 1835-1 Kasori-cho, Wakaba-ku, Chiba 264-0017, Japan^b Polan Clinic, 1-7-25 Chuodori, Morioka-shi Iwate 020-0021, Japan

Abstract

According to the biography of Dr Todo Yoshimasu, he visited to Lord Nambu in 1752. However, this biography does not describe the detail of his therapeutic process. Recently we found out the historical materials, i.e. Zassho which is a diary written by a chief counselor of Morioka-Nambu feudal domain. This diary describes the detail of Dr Todo Yoshimasu's medical activity to the Lord Nambu. This report intends to introduce the description of this diary and discuss concrete activities of Dr Todo Yoshimasu. This report is a new significant excavation since when publication Todo-zenshu in 1917.

Key words : Todo Yoshimasu, Lord Nambu, Zassho, diary of chief counselor

要旨

吉益東洞の伝記によると、彼は1752年に南部侯を往診している。しかしこの伝記には治療過程は記されていない。最近筆者らは『雑書』という史料を見いだした。この書物は盛岡南部藩の家老によって記された日記である。この日記には東洞の南部侯に対する治療の詳細が記されている。本稿はこの日記を紹介し、併せて吉益東洞の具体的な行動について報告することを意図した。これは吉益東洞関連の史料として『東洞全集』出版（1917年）以来の意義ある発掘である。

キーワード：吉益東洞、南部侯、雑書、家老日記

緒言

『東洞全集』¹⁾には、吉益東洞の没後に息子達によって記された伝記『東洞先生行状』が収載されている。この中に宝暦2（1752）年に東洞が盛岡の南部侯を往診したことが記されている²⁾。

ところが、南部侯の病状の詳細や用いた方剤についてはこれまで全く不明であった。筆者らは南部侯と東洞の関係がどのようなものであったかについて調査を進める中で、幸にも盛岡藩家老席日記『雑書』³⁾の中に、この疑問を解き明かす記述のあることを見いだした。東洞の臨床治験については『建殊録』⁴⁾等に記されているが、この『雑書』の記述は東洞の臨床の実際について窺い知ることのできる貴重なものと考えた。そこで、本稿では『東洞先生行状』を参考としつつ、『雑書』に記されたあらたな知見につ

いて紹介し、検討を試みる。

1. 対象と方法

1) 『東洞全集』に収められている『東洞先生行状』の南部侯往診の部分を検討の対象とした。

2) 盛岡藩家老席日記『雑書』は、家老席の書記にあたる藩士が家老の政務日記として記したもので、盛岡南部藩の代表的な公的記録である。家老職の責務は藩の政務全般に及んでいたもので、この日記には家老席での協議・決定事項、代官所など下部機関からの報告、家老職の日常的処理事項が主に記されている。原本は寛永から天保までの197年間の記録である。盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館が刊行した『雑書』は毛筆で記された原文を解読し活字化した刊本である。

本研究では、この活字本『雑書』の第22巻（寛延

4年—宝暦2年)を検討の対象とした。

2. 結果

1) 『東洞先生行状』の記述

原文は漢文であるので、これを読み下した文章を『吉益東洞の研究』⁵⁾から引用する。

○ 是の年(寛延4年)の春正月、南部侯に病有り。侍臣をして其の病状を審らかにせしめて、処方先生に請う。先生の術を信じ、侍医、数輩をして、先生に従学せしむ。此の時に方りて、其の侍医、孔尹肅を召還して、先生の処方を調進せしむ。其れ効を得ず。明年二月に至りて、既に危篤なり。先生を其の国に召す。先生往きて診す。遇ち侯に謂いて曰く「前剂応ぜざるに非ず。君侯の病劇しく、未だ其の驗を得ざるなり。臣に他術なし。固より其の死生を知らず」と。敢えて辞す。侯曰く「先生、辞すること勿れ。他医の能く治する所に非ざるなり。寡人、心に決す」と。死を以て先生に委ぬ。先生乃ち許諾し、益々前剂を進む。明日、侍臣、先生に謂いて曰く「寡君、孔尹肅を黜く」と。先生曰く「何の故ぞ」と。侍臣曰く「昨、先生進む所の薬は、尹肅が献ずる所と同方にして、寡君之を嘗め、其の味大いに異なれりと。故に其の学の粗なるを咎むる」と。先生曰く「侯、過てり、侯、過てり。方略を弁ぜざるの過りなり。尹肅に何の罪あらん。夫れ方は伝うべく、略は伝うべからず。尹肅用うる所の者は方にして、我れ用うる所の者は略なり。君侯の病篤し。平剂の能く応ずる所に非ざるなり。故に其の分量を陪す。是れ味の異なる所以なり。請う、試みに尹肅をして其の分量を記せしめよ。吾も亦た以て之を証せん。毫釐違ふこと無し。是れ其の方なればなり。尹肅に何の罪か有らん」と。侍臣、諸れを侯に告ぐ。侯、聴きて過を知る。即ち尹肅を赦す。是れに由りて益々先生を信じ、議を政事に及ぶ。侯の病癒ゆること有れば、必ず將に用いんとするなり。其の四月、侯の病、少々退く。気体爽然として、食始めて進む。侯、悦びに勝えず。先生を饗して、左右に酒を賜う。公族、群臣、初めて喜色有り。北奥の地、四月もなお大寒す。而れども一日熱すること盛夏の如きなり。侯、此の変氣に遇い、病勢復た加う。幾ど將に殆からんと。遇ち、訣して曰く「諸侯、先生の薬を服すること、寡人尤も其れ先ならん。今、良医の薬を服して、良医の手に斃るも、寡人、遺憾なし」と。言絶え涙下りて逝きぬ。

この記述の要点を箇条書きすると：

- 1) 寛延4年の正月に南部侯が不調となり、病状を記した書状が届き処方求められた。南部藩侍医で東洞門下の穴沢尹肅が国元に帰り、東洞から教示された処方を南部侯に差し上げたが無効であった。(寛延4年10月に宝暦と改元)
- 2) 翌年(宝暦2年)2月に南部侯の病状が悪化。盛岡への往診を依頼された。
- 3) 東洞の治療により症状は改善。大いに感謝された。
- 4) しかし、気候変動のためか、病状は再び悪化し、亡くなった。

2. 盛岡藩家老席日記『雑書』の記述

〔注記〕以下の引用文は家老職の者が記しているが、主君を尊崇する意味で「前書有之通 屋形様」「内々被 仰越候付」のように主君に関係する言葉の前に一文字の空白を置いている。吉益東洞の東洞は号で、名は為則、通称は周助である。ここには吉益周助として記されている。周助に下線を付した。

宝暦2(1752)年3月3日(東洞往診の数日前の記述)

屋形様兼て御腰御居敷込御痛被成御座。去年御下向後六月中旬頃より御歩行御不自由之様ニ被遊御座候付、御側御用被 仰付置く候御医師穴沢立格御薬被 召上、御快方ニ被為 入、七月中旬右御痛為御保養、鶯宿へ二廻御入湯御相応被遊候付、其後九月中旬又候鶯宿へ御湯治三廻御入湯御相応被遊候付、十月中旬より御動氣被為出、御息たわしく御足なと少々御浮腫被遊御座候付、立格被 仰付御薬附子六物湯御用被遊、尤宮杜桐庵御診被 仰付、段々御順快ニ被成御座候付、当正月十日頃より余寒御当被遊候哉、又々御不快ニ被成御座、御瘦被為見、御下通御浮腫少々被成御座候付、二月初頃嶋玄適御診被 仰付、尤桐庵・立格儀も御診被 仰付、御薬ハ玄適被 仰付、三和散ニ御散薬山州桂散御用、段々御薬用被遊候付御同篇之内、去ル朔日頃ニ至二分程御増被遊候付、朔日より御薬保脾湯玄適差上候付、御腫氣少々御引被遊候様ニ被為 入、御腫氣巡り御上通ハ御増被遊候哉と相診候由、御医師共申上之、

この記述の要点を記すと：

- 1) 南部侯は以前から腰・臀部の痛みがあったが、昨年、江戸から国元に下向(4月)した後の6月中旬に痛みのために歩行困難となった。

- 2) 侍医の穴沢立格の薬で快方に向かった。
- 3) 7月中旬に保養のため鶯宿で湯治。
- 4) 10月中旬に動気が出現。呼吸も頻数となった。
下肢に浮腫。穴沢立格が附子六物湯を投与。その後は比較的順調に経過。
- 5) 宝暦2年正月10日頃から痛みが再発。浮腫も出現。
- 6) 2月になり嶋玄適が主となり、宮杜桐庵、穴沢立格が補佐。嶋玄適が三和散と山州桂散を投与。わずかに有効。(本文には山州は山冠に州の一字であるが、伯州散に倣い、山城の国・山に州とした)。
- 7) 3月1日頃に嶋玄適が保脾湯を投与。浮腫が軽減。食事摂取量も増加した。

宝暦2年3月16日

前書有之通 屋形様御様躰御医師共相診、御薬被召上御同篇被成御座候内、兼て京都牢人医吉益周助と申ものへ御内々被仰越候付、先頃罷下候間被為召御様躰診被仰付候処、御腫氣不少第一虚り御動気御心下之動気強被遊御座候間、御氣遣ニ奉存候趣申上候ニ付、嶋玄適・宮杜桐庵へも対談被仰付候上、去ル八日より周助ニ御薬被仰付、越婢加朮附湯ト申御薬指上候処、其後御小水御通利宜御動気も余程御鎮り被遊候ニ付、四五日も右之通打続御動気被為止候得は御順快之趣ニ申上、段々御薬差上候内、去ル十一日より御心下之御動気強、御脈等も御不出来ニ候様奉診候趣申出ル、然所同晩御雪隠へ被為入、其節御胸間不宜由、御意有之、間もなく御吐逆被遊、御吐物ハ御食物ハ無之、癡血之かたまり申様成魚腸之ことき穢物壺ツ血交御吐被遊、又候三度目半時過薄血交を御吐被遊、右三度之御吐逆以後御心持殊之外宜御覚、御胸之内透候様 思召候段 御意有之、右御吐物之儀周助へ御尋有之候処、甚穢物ニて御座候、中々一朝一夕之物ニては無之、此物ハ随分出申事宜御座候、最初奉診付 御意被遊候ハ、時々御耳杯御鳴被遊候由、右御答ニも申上候通、御衄なと申候ハ御耳之鳴相止可申旨申上候、ケ様之儀も無之ニハ不然候得共、兎角内ニ有之候ハ、出申方宜儀之由申上ル、翌朝御うかい被遊候節、又候御吐逆有之、昨夜三度目之御吐物之通ニて其後ハ、御吐物相止、御腫氣ハ少々御引被遊候御様子ニ被為入、兎角二三日打続右之通不被為入候得ハ、御順快之方難申上奉存候、御病ハ治シ候御様子御座候旨周助

申上、其後去ル十二・十三日御容躰御同篇之内、御氣分ハ御宜被為入、御動気・御脈共差て御変り被遊御儀不被成御座旨、御医師共診之趣申出、尤周助儀十四日晚寄罷出相診候処、右之通御容躰差て御変不被遊候内、虚り御動気ハ御鎮被成候得共、御心下之御動気強被為入候付、御薬方転し木防已湯ト申御煎湯差上申旨、一応相転し指上御様子次第又々前方指上候様可仕旨申上候、右之通御様躰別て御変も不被遊、御氣分差て御変り不被為入候得共、御長病之御儀故、当御参勤之御時節前御全快被遊、当月御発駕可被遊御容躰ニハ不被成御座趣、御医師共申上候付、右為御届御用人山本郷助被、仰付、今日立為御登、左之通被仰出、

兼て御持病之御脚膝痛、去冬中より被為発、此節御浮腫差出御乗輿被遊候儀、長途難御成御様躰ニ被成御座候、依之御参府御延引被成、御快気次第御参府可被遊旨(下略)

この記録の要点を箇条書きすると：

- 1) 宝暦2年3月8日診察開始。
- 2) 前年からの膝痛・下腰痛が悪化。食欲不振で臥床状態。下肢浮腫、虚里(心尖部)の動気、心下の動気、小便不利がある。越婢加朮附湯を投与。(本文の架は加朮の誤り)
- 3) その結果、尿量が増加。胸腹部の動悸も軽減。
- 4) 3月11日。心下の動気が再度出現。脈も弱くなる。夕刻、便所に行ったとき胸の不快感を自覚。その後、口から魚腸のような汚い痰をひとかたまり吐いた。
- 5) 12日午前3時頃、薄く血液の混じった痰を吐いた。この後、気分が良くなり、胸がすっきりした。

周助に尋ねると、「吐いた痰は非常に汚く、一朝一夕に胸の中に貯まった物ではない。この様な体内の汚物は出たほうが良い。初診時に耳鳴りがすると言われたがこれも止まるでしょう」との答えであった。

この朝、洗面時に再び痰を吐いた。痰の性状は午前3時頃のものと同じであった。その後、痰を吐くことは無く、下肢の浮腫も軽減した。「これで食事が摂れるようになれば回復間違いありません」と周助が言った。

- 6) 13日。気分も良く、胸腹の動気も治まっており、脈も正常になった。

7) 14日の晩。周助が再度の診察。全体的に良い状態である。「虚里の動気は鎮まっているが、心下の動気が強くなっているので木防已湯に転方を試みたい」と周助が言った。病気は回復し、気分も良い。

8) 参勤交代で今月中に江戸に向け出発の予定であるが、長期間の病気であったので、体力の回復が十分ではない。出発は遅らせた方が良いとの侍医団の意見である。参勤を延引することを幕府に願い出る。

『雑書』その後の記述：

3月20日。屋形様御様躰御同篇之内、御動気も御静被成候方ニも御様子御宜被為 入候段、御医師共周助へ同夜御様躰相伺候趣申出、尤周助相診候趣五分々程ニハ御治シ被成候様ニ存上候由、俄御えつきの御気味被成御座候付、御薬方転シ小陥胸湯ト申御煎湯差上候処、打続御えつき被成御座候ニ付、猶亦御薬方相転、茯苓飲と申候煎湯差上以後、御様躰周助罷出相診候処、差て御変り不被遊御座候得共、御えつき強被成御座、御腫中御動気強ク相成候得共、御急変被為有御様躰ニハ無御座候由申聞ル、右之御薬御用被成、御えつき御間遠ニ被成御座旨申出之。

3月27日。屋形様御様躰、去ル二十日周助御薬方転上候以後、御動気御鎮り御えつきも相止、御膳等御心能被 召上候得共御疲ハ被成御座、差て御変りも被成御座候内、昨二十六日より急ニ嘔気ニ相成候付、猶亦御疲も被遊、御昇之御気味も被成御座、不宜御様子被成御座、今朝ニ至猶亦周助被為 召相診候処、御動気ハ昨日相診候よりは半過相減申候、今日ハ御胸へ脇腹より御痞差込御痛も有之候付、御薬方相転柴胡加桂湯ト申御煎湯差上、御腫氣も弥被為引、御病気は過半治シ申候様子ニ候共、御疲被成御座候付、御食事等唯今迄之通ニハ不被 召上、甚衰御見得被遊候由、依之周助辞退之義委細申出候付、今晚より宮杜桐庵御薬可被 召上旨被 仰出、清水良庵診被 仰付、桐庵へ相談仕、御薬家方枳実湯差上候御痰少シ静被為 成、御呼吸も少々御鎮被成御座候得共、御勞レ殊之外被遊御座、御胸御痞も和キ不申、甚御差重被遊候容躰被為 入旨、御医師共申出之。

屋形様御病気ニ付 公義へ御医師御願被 仰上候。

3月28日。屋形様御様躰以之外御勝不被遊旨桐庵・良庵申出、尤御粥少々被 召上御湯被上候節、急

御昇強御呼吸甚不宜候ニ付、参熊丹差上候得共御屈不被遊、御引灸等差上候得共御養生不被為 叶、御年四十五ニて申ノ中刻御卒去被遊、依之詰合高知・同子共・北九兵衛・・・・。

以上の要点を掲げると：

- 1) 一時快復したかに見えた6日後の3月20日、えつき（吐物のない嘔逆）が出現。そこで小陥胸湯に転方した。
- 2) 無効であったので茯苓飲に転方。えつきが軽減した。
- 3) 小康状態であったが3月26日から嘔気が出現。全身の衰弱が進行。
- 4) 3月27日。容体が悪化。脇腹から胸に差し込むようなつかえ感が起こった。そこで柴胡加桂湯（小柴胡湯加桂枝）に転方。これは有効であったが、食事摂取はできない状態になった。本文の柴胡加桂湯は『東洞先生配剂録』を参照し小柴胡湯加桂枝とした。
- 5) 東洞（周助）は治療を辞退。
- 6) 侍医の宮杜桐庵・清水良庵が治療に当たった。枳実湯を用い、少しく有効であったが全身衰弱が進んだ。
- 7) 重篤な病状であるので、家老が幕府御典医の急派を要請した。
- 8) 3月28日。薬を服用しようとしたところ突然に卒倒し、呼吸が途絶えがちになった。参熊丹を服用させようとしたが飲み込めなかった。灸も行ったが午後4時頃、帰らぬ人となった。四十五歳であった。

3. 考察

東洞が往診した盛岡南部藩主は8代藩主・南部利規（としみ1708－1752）⁶⁾である。1725年に藩主に就く。徳川吉宗の享保の改革に倣って藩の行財政改革に取り組んだ名君で、進取の気風に富んでいた。『吉益家門人録』⁷⁾によると、南部藩侍医の東洞塾入門者は第10番・穴沢尹肅、11番・三浦道悦、12番・福田秀俊であり、開塾早々の入門である。これは藩主の意向を反映したものであったと『行状』は記している。なお、『行状』において穴沢尹肅は孔尹肅と儒者として尊称されている。

東洞の年譜によると、往診した宝暦2（1752）年は東洞50歳。『類聚方』『方極』『薬徴』を脱稿していた。往診については宝暦2年の2月であることは

『行状』に記されているが、詳細な月日は不明であった。このたびの新史料により、宝暦2年3月8日藩主の診察開始が確定した。この数日前に東洞は盛岡に到着していると考えて良い。京都から盛岡までの旅程は約25日であるから、東洞が京都を出立したのは宝暦2年2月8日頃と推定される⁸⁾。

藩主が両腿部痛と膝痛に悩んでいたことは前年に知ったことで、これは病状を記し、処方求めた書状が寛延4年の春に東洞宛てに届いているからである。この書状の仲介者は盛岡藩侍医で東洞門下の穴沢尹肅らと考えられる。

穴沢尹肅は返書を携えて盛岡に戻り、治療を開始した。恐らく具体的な方剤の指導を得ての帰藩である。

ところで、往診した東洞が具体的にどのような方剤を用いたのかはこれまで不詳であったが、このたびの史料によってそれが明らかになった。東洞の臨床治療は『建殊録』と『東洞先生配剤録』⁹⁾から知ることができるが、ひとりの患者を前にして方剤を運用してゆくありさまを『雑書』は活き活きと記している。

『奉答南部侯書』には下腿痛・膝痛の背後に宿疾があること。この宿疾を取り除くには瞑眩を覚悟すべきこと。死生は天命であること。自らの親試実験により得たものが確かであり、陶弘景の説が妥当で李時珍の説は臆説に過ぎないこと等が記されている。この書には『千金方』や『外台秘要』も動員しての論陣が張られているが、これは藩主のみならず守旧派の侍医たちをも説得する狙いがあったものと推測される。

そして、それまでの侍医団による治療が思わしい成果を挙げていなかったこともあって、東洞が招かれた。

『東洞先生行状』『雑書』『奉答南部侯書』『祭南部源侯文』¹⁰⁾を織り交ぜると、南部侯往診の顛末は次のように纏められる。なお、『雑書』については上記の引用文の他に寛延4年正月から宝暦2年の東洞往診までの藩主の健康状態に関する断片的な記述も組み入れた。

- 1) 寛延4年春に南部侯からの処方依頼書が届いた(藩主は江戸より国元へ)。
- 2) 同年夏に『奉答南部侯書』として返信。
- 3) 南部藩侍医で東洞門下の穴沢尹肅が東洞の助

言を得て帰藩。

- 4) 穴沢尹肅が治療に参加したが、藩主の病状は悪化。両下腿痛、臀部痛、膝痛に加え浮腫と食欲不振が改善せず次第に重篤化。
- 5) 往診の依頼を得て、宝暦2年2月8日頃に京都を出立。
- 6) 3月8日に藩主の治療を開始。
- 7) 越婢加朮附湯・木防己湯により3月14日には非常に良い状態になった。
- この間、魚腸のような血塊を吐き、血液を混えた喀痰が出ている。
- 8) 江戸への参勤を論じるまでに病状は快復した。
- 9) 3月20日。えつきが起こった。茯苓飲で鎮まる。
- 10) 3月27日。重篤な状態に陥る。東洞は治療を辞退。
- 11) 3月28日。死亡。

なお、『行状』には帰途に東洞が江戸に止まり、老中・堀田公から東洞の古医方と幕府御典医(望月三英)の古医方との比較を行うことを將軍の命令として受けたことが記されている。

○ 先生、北奥より東都に過る。堀田侯、先生をその邸に召して謂いて曰く「内命あり。今、汝が医を試みよ」と。(『行状』)¹¹⁾

この事案は4月に江戸に参勤しなければならなかった南部利視侯が参勤を延引した事情、死亡に至った状況などの釈明を幕閣の重役に対して行う事を盛岡南部藩当局から要請され、東洞が老中・堀田侯に面会したことが発端になったものと推測している。参勤しないことは武家諸法度に違背するもので、領国安堵に関わる重大事であったのである。

翌年、東洞は南部侯の一周忌に際して『祭南部源侯文』を盛岡南部藩宛てに送り(宝暦3年4月)、南部利視侯が東洞医論の良き理解者であったことに心からの感謝の意を表している。

付記 Webサイトで吉益周助の名で検索したところ、東京大学医学図書館に『吉益周助事績関係書』があることを見いだした。別書名は『吉益東洞南部家記録』である。大正6(1916)年の書。柱に「盛岡南部邸」の藍罫紙を用いており、筆写者は恐らく盛岡南部邸の資料整理に当たっていたと考えられる佐々木正郎と山本茂昭である。青木正興からの質問に対する回答

書で、20葉からなる仮綴冊子である。この冊子は本論文で引用した『盛岡藩家老席日記・雑書』を筆写したものである。

従って、『雑書』を根拠とした本論文は東洞の盛岡南部藩における事績研究という点では初めてのものではない。しかし、『吉益周助事績関係書』は学術書として公表されたものではなく、私信であると考ええる。

謝辞 盛岡藩家老席日記・『雑書』における吉益周助の記述については、もりおか歴史文化館学芸員・熊谷博史氏のご教示を得た。記して深く感謝の意を表す。

利益相反（COI）に関して開示すべきものなし。

文献

- 1) 芸備医学会（呉秀三）. 東洞全集. 復刻版, 思文閣, 京都 1970. 551-558.
- 2) 芸備医学会（呉秀三）. 東洞全集. 復刻版, 思文閣, 京都 1970. 554-555.
- 3) 盛岡市教育委員会, 盛岡中央公民館. 盛岡藩家老席日記・雑書 22巻. 盛岡 2009. 262.
- 4) 芸備医学会（呉秀三）. 東洞全集. 復刻版, 思文閣, 京都 1970. 473-500.
- 5) 寺澤捷年. 吉益東洞の研究. 岩波書店, 東京 2012. 67-68.
- 6) 熊谷孝. 南部史要. 復刻版, 熊谷印刷出版部, 盛岡 1972. 131-152.
- 7) 町泉寿郎. 吉益家門人録. 日本医史学雑誌 2001 ; 47 : 154-178.
- 8) 細井計, 伊藤博幸, 菅野文夫, 他. 岩手県の歴史. 山川出版, 東京 1999. 219.
- 9) 寺澤捷年. 吉益東洞の研究. 岩波書店, 東京 2012. 189-190.
- 10) 芸備医学会（呉秀三）. 東洞全集. 復刻版, 思文閣, 京都 1970. 540.
- 11) 寺澤捷年. 吉益東洞の研究. 岩波書店, 東京 2012. 203.